

## 福島第一原発の汚染処理水の問題

# 福島第一原発の汚染処理水処分 経産省「年内は厳しい」 政府方針決定は 21 年に持ち越し

東京新聞 2020 年 12 月 24 日 配信



処理水を保管するタンクが並ぶ東京電力福島第一原発=10月21日、東京新聞社へリ「おおづる」から撮影

東京電力福島第一原発の汚染水を浄化処理した後の放射性物質トリチウムを含む水の処分について、経済産業省は 24 日、方針決定が来年以降になる可能性が高いと明らかにした。担当者は本紙の取材に「年内の決定は厳しい」と説明。政府は海洋放出処分を検討しているが、風評被害を懸念する漁業団体などとの調整や対策の検討に時間がかかっている。(署名記事)

政府は当初、10月27日にも関係閣僚会議を開き、処理水を海水で薄めてトリチウム濃度を国の排出基準以下にし海に流す処分方針を決める方向だった。しかし、海洋放出によって水産物を中心に風評被害が避けられないとして、全国漁業協同組合連合会(全漁連)は「絶対反対」と政府に慎重な判断をするよう要求。自民党内でも一部に反対意見が出ている。東電は処理水を福島第一構内のタンクに保管しているが、2022年夏ごろには保管容量が限界を迎えるとしている。放出設備の整備に2年程度かかるため、年内の方針決定が急務とされていた。福島第一廃炉推進カンパニーの小野明最高責任者は24日の記者会見で「政府の方針が決まった後に対応を検討する」と述べるにとどめた。菅義偉首相は処理水の処分について、これまで「いつまでも先送りできない。政府として責任を持って結論を出す」と答えている。



トリチウム(三重水素) 放射能を帯びた水素で、酸素と結合してトリチウム水になる。普通の水と分離するのは難しく、汚染水を浄化している多核種除去設備でも取り除けない。放射線(ベータ線)は比較的弱く、人体に入っても大部分は排出される。放射能は 12.3 年で半減

# 立ち上る汚染蒸気、屋根に大穴 事故後間もない福島第一原発の空撮写真 734 枚を東電が公開

東京新聞 2020 年 12 月 23 日 配信

東京電力が、福島第一原発事故の発生から間もない 2011 年 3 月 20、24 の両日に無人航空機で空撮した写真 734 枚を公開した。写真の一部は核物質防護の理由から、東電がモザイクをかける修正をしていた。東京新聞原発取材班では、その中から 13 枚を選び、写真を拡大するなどして当時の状況を報告する。(署名記事)



写真1 上部の右から 1、2、3、4 号機。護岸の海水ポンプなどは津波で破壊された。中央付近に四角いの入った槽(逆洗弁ピット)があり、ここに海水をため、そこから消防車で原子炉に注水していた。



写真2 南側からの一コマ。左手前から 4、3、2、1 号機。どの原子炉建屋からも汚染された蒸気が立ち上っている



写真 3 山側から見た 1 号機。護岸近くにあった重油タンクが道路をふさいでいる。



写真 4 海側から見た 1 号機(左)。護岸近くにあった重油タンクが道路をふさいでいる。



写真 5 北側から見た 3、4 号機。原子炉建屋は水素爆発により大破。屋根に大きな穴が開いているのは 3 号機のタービン建屋で、水素爆発で飛んできた原子炉建屋のがれきによる穴とみられる。



写真 6 3 号機のアップ。槽の近くに並んだ注水用の消防車、吹き飛んだ建屋がれきの状況がよく分かる。



写真 7 3 号機タービン建屋の穴付近を拡大。大きながれきが屋根を突き破っているとみられる。小さいがれきが直線状に降り注いでいる。



写真 8 4 号機原子炉建屋。定期点検中で原子炉に核燃料はなかったが、地上約 30 メートルにある使用済み核燃料プールには約 1500 体の核燃料があった。長いアームを備えたコンクリート圧送車を使い、冷却水をプールに送り込んでいる。



写真 9 福島第一原発 1~4 号機前の防波堤。何の油かは不明だが、油膜が外洋に広がっている。



写真 10 1 号機の北側。地震によりりり面や道路に大きな亀裂が入っている。



写真 11 1~4 号機の山側。当時は松林が広がっていたが、その後、全て伐採され、汚染水処理後の水をためるタンク用地へと変わった。



写真 12 下中央の四角い建物は、現地対策本部がおかれた免震重要棟。その上にはグラウンドが見えるが、後に、汚染水からベータ線を出す放射性物質を取り除く処理装置(ALPS、アルプス)などの設置場所となった。



写真 13 福島第一原発の南側にあった展望台。現在は伐採した樹木の枝葉を保管する施設となっている。

# 「世界最悪」レベルの事故から9年半に 空から見た福島第一原発の今

東京新聞 2020年8月11日 配信

東京電力福島第一原発事故の発生から9年半になろうとしている。原発取材班は8月4日、本社へリ「あさづる」で原発や周辺の被災地を上空から取材した。現地の状況を報告する。（署名記事）



写真1 東京電力福島第一原発の全景。その周辺には汚染土を分別、保管する中間貯蔵施設が広がる。

東京・新木場のヘリポートから1時間あまりで上空に差しかった。「また施設が増えた」。原発周辺には、除染で出た汚染土などを長期管理する中間貯蔵施設が広がる。約1600ヘクタールの敷地は、東京都中野区や渋谷区の面積より大きい。国は用地の約73%を確保した。訪れるたび、県内各地から運ばれた大型土のうの山と、分別・貯蔵施設が増えることに驚く。



写真2 使用済み核燃料プールの保護作業が進む1号機。その上には大量のがれきが残り、草も生えている。そばに立つ1、2号機排気筒は上半分の解体が終わり、頂部には雨が入り込まないようふた取り付けられた＝福島県大熊町の東京電力福島第一原発で。

原発に視線を移すと、汚染水を浄化処理して貯蔵するタンクがひしめく様子は相変わらず。120メートルの高さがあった1、2号機排気筒は、トラブル連続の半年かけた解体作業で半分に。



写真3 2号機の使用済み核燃料は建屋側面に穴を開けて取り出す。装置を載せる構台用地の準備が進められていた。



写真4 雨水が入り込み、汚染水を増やす原因となっていた3号機タービン建屋の損傷部には白いカバーが設置された。この後、防水塗装などが実施される。

水素爆発による大穴が開き、みすぼらしい仮屋根が置かれていた3号機のタービン建屋屋上はがれきがほぼなくなり、真新しい白いカバーがかけられていた。炎天下、作業員が動き回る姿も。水漏れリスクの高いボルト締め型タンクを解体、溶接型に置き換える作業に追われていた。



写真5 敷地南端では、水漏れリスクの高いボルト締め型タンクの解体が進められていた。



写真6 タンク解体中の隣の区域では、溶接型タンクの新設が並行して進む。汚染水を浄化処理した後の水を保管するタンクは1000基を超えた。

1、2号機では使用済み核燃料の取り出しに向けた準備が進むものの、むき出しとなった1号機原子炉建屋上部には大量のがれきが残る。事故収束作業は、まだまだこれからだ。



写真7 かつて汚染水タンクの代わりに使われていたメガフロートは、内部にモルタルを詰めて着底。今後は物揚げ場などに使われる予定。



写真8 9月20日にオープンする福島県の東日本大震災・原子力災害伝承館(手前)。その奥には中間貯蔵施設、さらに奥には福島第一原発がある=福島県双葉町で



写真9 福島各地から運ばれた汚染土は、原発周辺に広がる中間貯蔵施設で土と根や石に分別され、長期貯蔵される=福島県大熊町で